

「柏崎の水」

赤尾（北条） じゅうさが 十三ヶ滝

十三ヶ滝には次のような伝説がある。

戦国時代、北条城主毛利丹後守は自分の婿である善根城主毛利大万之助を殺害しようと企んだ。丹後守は大万之助を北条城に誘い出すと、風呂に閉じ込めて蒸し殺してしまった。その仇討ちのため、善根城の侍十三人が北条城に向かったが、反撃され、赤尾の奥の沢へ逃げ込んだ。十三人の侍は、八石山の南の端にある善根城へ帰ろうと、高い滝の落ちる険しい崖によじ登ったが、みな落ちて死んでしまった。それからこの滝を十三ヶ滝と呼ぶようになった。(人名など詳細は諸説有り。)

十三ヶ滝は、八石山の登山道のひとつ「三ツ小沢コース」の途中、赤尾集落から2 kmほど赤尾川をさかのぼった地点にある。沢沿いを進む登山道は「八石の自然を守り親しむ会」やボランティアの人々の手によって、手すり・案内板の設置や道の整備などが行われており、滝までの道のりで特に苦労する場所はない。滝に到着すると、滝に向かって立ち並ぶ何本もの「のぼり」が目に入る。滝に近づくと、清冽な水が流れ落ちる、そのすぐ脇に、不動明王が祀られているのがわかる。また、少し離れた高台に休憩所があり、30 mほどの高さをもつ滝を一望できる。

八石山頂の避難小屋は、地域の住民を中心に、北条中学・常盤高校の生徒、市役所の山岳部といった人々が建築資材を担いで運び建設された。多くの人の八石山への想いが伺える話である。藍澤南城も、安政5年(1858)成立といわれる「三餘集」巻15のなかで、不動滝・屏風滝と並ぶ八石の滝のひとつとして、十三ヶ滝の詩を作っている。

天狗松北一峰傾 処処石泉相答鳴
幾有山霊箏曲想 十三懸水十三声



写真(矢印の場所が滝)

上：のぼりが並ぶ滝付近
右奥に不動明王が祀られている。
左：休憩所からの眺め
滝の全体を一望することができる。



参考にした本
「柏崎市伝説集」柏崎市教育委員会(388 K 冊)
「北条のはなし～史蹟と伝説」桑山省吾 著(224 冊)
「謀殺された八石の殿さま」中鱈石郷土史クラブ 編(224 冊)